

東京専門学校開校当時の国際交流―大隈重信とE・S・モース

大日方 純 夫

一 大学史資料センター―本年の事業概要

大学史資料センターでは、本学の文書および本学関係者に関する資料の受入れ・整理・保存・公開、所蔵資料の閲覧・複写サービスを行うとともに、企画展示・講演会等の開催、出版・刊行事業、自校史教育、早稲田大学百五十年史編纂事業、協力事業などを行っている。

本年は、企画展示として大隈記念室の「常設展大隈重信」のほかに、春季企画展「戦地に逝ったワセダのヒーロー―松井栄造の二四年―」、受贈資料展「早稲田の群像とその資料」、秋季企画展「大隈重信と小野梓 建学の礎―早稲田大学創立一三〇周年記念―」を開催した。

1 出版・刊行事業では、『大隈重信関係文書』第九巻の編集をすすめた（近く刊行）。自校史教育としては、引き続きオー

ブン教育センター設置科目「早稲田学」を開講して、学生に対し「創設者大隈重信」（前期）と「近代史のなかの早稲田大学」（後期）を講義した。

協力事業では、「梓立祭」（三月、高知県宿毛市）、「大隈祭」（五月、佐賀市大隈記念館）に講師を派遣し、「風見章展」（三月、茨城県常総市）の開催に協力するとともに講師を派遣した。また、「早稲田フェスタ in 遠州二〇一二 企画展示『戦地に逝ったワセダのヒーロー 松井栄造の二四年』展」（六月から七月、遠州稲門会・磐田市立図書館）の開催に協力した。

一方、本資料センターが委員会事務を担当している早稲田大学百五十年史編纂事業では、現在、全三巻の構想・構成に関する基礎的な検討作業をすすめている。そのなかで、おおよその方向として、既刊の『早稲田大学百年史』と重なる時期については、『百年史』をベースとし、その後の研究の進展や新たな事実の発見などを反映させていくことを確認してきている。

百五十年史編纂の進捗状況については本記要後掲の記事にゆずり、ここでは、秋季企画展「大隈重信と小野梓 建学の礎」を想起しつつ、開校期にかかわる事実の一端を紹介しておくことにしたい。

二 大隈重信とモースの交流

一八八三（明治一六）年一月二日付の『読売新聞』は、つぎのように報じている。

改進黨の有志者の設立せられし早稲田の東京専門学校は昨日教授始めの式を執行せられ文部省御雇のモールス氏の演説など有りて大層盛んなりしとぞ

アメリカの生物学者・動物学者E・S・モースは、一八七七年六月に来日して東京大学の教授となったが、一八七

九年九月に帰国し、一八八二年六月にまた来日した。そして、この年一〇月二一日の東京専門学校開校式には、来賓として出席している。⁽¹⁾

その約七〇日後の一八八三年一月二一日、東京専門学校の新年最初の教授始めの式にあたって、モースは東京専門学校で進化論について講演した(二月三日付の『郵便報知新聞』では演題は「人類の起源」)。小野梓の当日の日記には、つぎのように記されている。⁽²⁾

陰。早起。到^二早稲田^一為^二發校之備^一。雉橋老先在。午後米人猛須翁来、演^二進化論^一。論畢聽^二薩摩琵琶^一。到^レ夜而還^レ家。

小野も講演が終わってから薩摩琵琶を聞き、夜になって帰宅したのである。

日本での体験や見聞を記したモースの「Japan day by day」を見ると、当日の様子はつぎのように記されている。⁽³⁾まず、講演について。

昨日私は大隈氏の学校の開校式で講演するべく招かれた。私の演題は進化論即ちダーウィニズムで私の以前の特別学生の一人である石川氏が、私のために通訳した。

講演終了後、モースらは大隈の別邸に招かれた。

講演が終ると我々は、学校のすぐ裏にある、大隈氏の別荘へ招待された。これは美しい部屋のある家で、二十年前純日本風に建てられた。部屋は皆大きく美しく、床間もそれに相当した深さを持っていた。私は、大きな部屋の床間が非常に深く、懸物、花瓶、その他の装飾品も、それにつりあつて大きいことに気がついていた。床間の前が名譽の席であるということは、興味があろう。

そして、琵琶の演奏が始まった。

大隈氏は有名な盲人の琵琶弾奏家を雇っていた(凶略)。この音楽は他の楽器に依る物と全然異り、ある種の音は哀調に充ち、

心を動かした。

モースは琵琶演奏の仕方を観察して詳しく記している。しばらく弹奏した後、緑の葉を何枚か入れたコップが持たされた。琵琶奏者はその葉を一枚とって唇に押し当て、吹きながら指の圧力を加減して、著しく透明な高低音を出した。モースもやってみたが、やっとキーツという音が出ただけだった。

この余興が終わると、モースらは別の部屋に案内され、日本料理のご馳走が出された。

私は日本で美味な料理を沢山食べたが、この時出たお吸物ほど結構なもの、それ迄に経験したことが無い。野猪の切身を入れたお吸物は、殊によかった。酔につけた生の魚肉も美味だった。

モースはもう一つ約束があるとして、六時半、急いで大隈の別邸を退去した。おそらくこの日はモースにとって大満足の一日だったことであろう。大隈邸には琵琶の音がなぐれ、モースは配膳された日本料理を堪能したのであった。

五日後の一月二六日、モースはビゲロウとともに、今度は「大学に近い大隈氏の都会邸宅」へ食事に招かれた。⁽⁴⁾ 当時、大隈の本邸は文部省・大学予備門に隣接した雉子橋（竹橋の近く）にあった（早稲田の方は別荘）。

ビゲロウとはモースとともに来日していたボストンの医者で、モースによれば、彼は日本の芸術品を熱心に崇拝し、蒐集していた。モースとビゲロウは、フェノロサとともに三人で、前年七月、日本の古美術を観察・蒐集するため、京都など関西方面や瀬戸内地方に出かけていた。出発に先立って、モースは次のように記していた。⁽⁵⁾

私は陶器の蒐集に多数の標本を増加しようと思う。ドクタア・ビゲロウは刀剣、鏢、漆器のいろいろな形式の物を手に入れるだろうし、フェノロサ氏は彼の顕著な絵画の蒐集を増大することであろう。かくて我々はボストンを中心に、世界のどこよりも大きな、日本の美術品の蒐集を持つようになるであろう。

モースは陶器の蒐集に関心を寄せていた。

一月一六日に大隈邸を訪れた際の様子を、モースはつぎのように記している。

家は外国風で非常に美しく、ドクタァ・ビゲロウはその設備を完全であると評した。食堂の床は見事な板張で、戸や窓の上には複雑な木彫があった。庭園は純日本風であるが、円形の芝生だけは、確かに日本風ではない。

盆にのせ箸をそえた日本料理が卓上に並べられた。日本人が住む外国風の家のなかで、外国人が日本料理をイスに座って食する情景がそこにはあった。目の前には、日本^⑥の庭園が広がっている。

この食事の席には、福沢諭吉・小野梓らも同席していた。この日の小野の日記には、つぎのように記されている。^⑥

訪 雑橋老。米人猛須・備子郎・福沢等来会、共饗膳。談話涉^⑦數時、二更還^⑧家。

談話は数時間に及び、小野が帰宅したのは夜一〇時頃であった。

東京大学でモースの教えをうけた石川千代松（後に東京大学の動物学教授）は、つぎのように回想している。^⑦

ある日、モースを訪問したところ、「お前はよい処に来て呉れた。これから大隈さんの処へ陶器を見せて貰ひに行くのだから、一緒に行つて通弁をして呉れないか」と言われた。そこで「牛ヶ淵」（九段下）の大隈宅に同行した。大隈はモースを立派な洋室に通して、陶器を山のように積んで見せた。石川が通訳をして話しているうちに、大隈は何を思ったのか、「左様に珍しいものならば此陶器を皆献じませう」と言った。そして、その晩、モース宅には車に山のように載せた瀬戸物が届いた。その後、東京専門学校の授業開始式の際の宴会で、大隈は石川に対し、「先日お前が通弁として宅に来られた時に見せた陶器は大事なもので、あれ等は決して上げ度くはなかつたのだが、話して居る内にどうしてもあげなくてはならぬ様になつた」と語った。

モースが石川を伴つて大隈邸に出かけ陶器を見せてもらったというのは、石川の回想によれば、一月一日の東京専門学校での講演以前ということになる。いずれにせよ、モースの陶器コレクションのなかには、大隈からのプレゼ

ントが含まれていたのである。二月にモースは日本を去り、ヨーロッパを経由して帰国した。

モースを通じた日本への進化論の導入に、開校当初の東京専門学校は関わり、また、大隈はモースとの交流を通じて、モースの陶器蒐集に貢献した。東京専門学校開校当時の国際交流の一端である。なお、小野梓は「日本歴史」の原稿執筆に際して、モース著『大森介墟古物編』（東京大学法理文学部印行、一八七九年二月）を参照している。⁽⁹⁾

註

- (1) 早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史』第一巻、早稲田大学、一九七八年、四六六頁。
- (2) 早稲田大学大学史編集所編『小野梓全集』第五巻、早稲田大学、一九八二年、四三二頁。
- (3) 石川欣一訳『日本その日その日』3、平凡社〈東洋文庫〉、一九七二年、二〇〇～二〇二頁。
- (4) 同前、二〇二頁。
- (5) 同前、六八頁。
- (6) 前掲『小野梓全集』第五巻、四三一～四三三頁。
- (7) 「老科学者の手記」『石川千代松全集』第四巻、興文社、一九三六年（ただし、磯野直秀『モースその日その日』有隣堂、一八八七年、による）。
- (8) 守屋毅編『共同研究 モースと日本』小学館、一九八八年、三〇八頁。
- (9) 前掲『小野梓全集』第四巻、一九八一年、七七〇頁（「解題」）。